

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月7日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02343

研究課題名(和文)現代アメリカ演劇における批評理論の活用に関する研究

研究課題名(英文)Studies in the Applications of Critical Theory to Modern American Drama

研究代表者

岡本 太助 (OKAMOTO, Tasuke)

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：90523176

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代アメリカ演劇の研究において批評理論の知見を活用する可能性を検証し、またそれを実践するものである。演劇を演劇たらしめているものが何かについて考察を行い、「演劇とは～である」という存在論的定義から、演劇が演劇らしく「見える」とは何を意味するのかという認識論的省察へと、演劇研究の主眼がシフトしてきた状況を明らかにすることを目指す。理論については、演劇における言語や身体の動きなどを意味の伝達を担う記号として解釈する記号論的アプローチの抱える課題を精査し、パフォーマンス理論やアフェクト理論によってその課題を乗り越えられるのか否かを検討する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において理論的アプローチを全面に出したことはそれ自体パフォーマンスの効果があり、日本におけるアメリカ演劇研究が作品分析か実践面での議論に偏りがちな傾向に一石を投じる意図があった。アメリカ演劇研究者からは、批判的なものも含めて様々な反応があり、今後模索されるべき研究方法として一定の認知を得たものと評価できる。さらにアメリカ演劇以外の研究者や一般の方々(学生を含む)にとっても、理論的枠組みを共有することにより対話と議論の場をひろくことができるため、社会的、教育的にも研究によって得られた知見を波及させる方法としても有用であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study examines, both theoretically and practically, the possibility of applying critical theory to the studies of modern American drama. One of the goals is to document the shift in drama and theater studies away from ontological definitions (i.e., answers to the question "What is theater?") to epistemological or cognitive reflections on what it exactly means that theater "appears to be" theater in the eye of the beholder. As a theoretical framework, this study focuses on the semiotic approaches (in which language and the body in theater, for instance, are mostly regarded as signs that only function as conveyers of meaning) and the problems they face, considering the possibility of overcoming the obstacles by means of performance theory and affect theory.

研究分野：アメリカ演劇、英語圏文学、批評理論

キーワード：アメリカ演劇 批評理論 アフェクト理論 パフォーマンス研究

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降の日本におけるアメリカ演劇研究が、テキストの精読に基づく作品研究（または作家研究）と、演劇の実践に関わる分野の研究（パフォーマンス研究など）に二極化し、相互の学術的交流や連携が十分に行われていないという状況が、研究開始時の背景にあった。また同じ時期に登場した新しい劇作家やその作品を、従来のアメリカ演劇研究の文脈との関連において議論の俎上に載せる試みもほんの端緒にすぎたばかりであったため、アメリカ演劇史の刷新という目的においても、理論に根差した研究方法を整備する必要があった。

2. 研究の目的

「理論以後」のパラダイム転換として語られることの多い1990年代以降の思潮の文脈において、年々希薄化しつつあるアメリカ演劇の実践と研究の関連について再考し、その両者をつなぎなおすために批評理論を活用する方法とその可能性について検討するというのが、本研究の基本的な目的である。またこれは上述したような作品研究と実践的演劇研究のあいだの橋渡し役を担うものとして、批評理論の効用を再評価することを目指すものでもある。単に批評理論を「用いて」文芸批評をするのではなく、作品を読み解くなかでその読解が依拠する理論について再考し、また理論のフィルターを通して見ることで新たな作品読解の可能性が開かれることを、実践的に提示するよう心がけた。

3. 研究の方法

本研究の遂行にあたっては、予備的な手続きとして、作品テキストや理論書をはじめとする各種文献資料の収集と整理、およびその精査を行った。次に、資料の精査により明らかになった事実を報告し、それを本研究テーマの観点と結びつけ考察した成果を公開するために、学会、研究会およびシンポジウムなどの場で口頭発表を行った。さらに口頭発表の内容を日本語と英語の両方で論文としてまとめ直し、学術誌への投稿論文および研究書の掲載論文として刊行した。それぞれの口頭発表や論文は特定の作家や作品に即した内容となっているが、批評理論の応用という共通のテーマを設定することにより、全体としては、複数のテキストに反復して現れるパターンを捉え、個々の作品ごとの差異を超えたところで生じる演劇という現象そのものについて考える視点を提示することを目指した。

4. 研究成果

(1) 2015年度の主な研究成果としては、2016年3月発行の『アメリカ演劇』27号に掲載された論文、「理論以後」のパラダイム——ラジーヴ・ジョセフ劇における否定の存在論」を挙げることができる。本研究課題開始の前年度に行った研究発表をもとにする本論文には、本研究全体のテーマの重要な概念である「理論以後のパラダイム」や「否定の存在論」に関する基礎的考察が盛り込まれており、以降の研究における参照枠を設定するものと位置づけられる。また2015年度には、「パフォーマンスと表出的アイデンティティ——Sam Shepard 劇をめぐる理論的考察」および「建物と怪物——現代アメリカ小説におけるパフォーマンス」の2本の研究発表を行い、特にパフォーマンス研究の観点から演劇研究における理論の活用に関して考察を深め、また関連分野の研究者との意見交換を積極的に行った。

(2) 2016年度には、前年度の発表内容を論文として刊行する予定であったが、雑誌が発行取りやめとなったため次年度まで見送ることとなった。同年度には「記憶の精確な座標」——Guillermo Verdecchia 劇における転位と越境」と題された研究発表において、ラティーノ演劇やボーダー研究などの新たな分野の研究に挑戦し、地政学的パフォーマンス研究とも呼ぶべきアプローチについての考察を深めることができた。また別の研究発表「クロス・メディア的視点から再考するリアリティTVと幸福の追求」（九州アメリカ文学会第62回大会、2016年5月7日、九州大学伊都キャンパス）は演劇に関する研究ではないが、小説・映画・テレビ・音楽といった複数のメディアが交錯する場に生じるパフォーマンスのあり方を論じるという点では、本研究課題にとっても有益な知見をもたらすものとなった。

(3) 2017年度には、前年度刊行見送りとなっていた論文「シェパード劇におけるパフォーマンスと表出的アイデンティティ」が刊行された。本論文では、俳優としても人気を博した劇作家サム・シェパードがその劇作を通して「サム・シェパード」という神話的キャラクターを演出してきたという視点から、そうしたパフォーマンス的アイデンティティが創出される仕組みが、演劇というものが構造化されていく過程とパラレルであることを示した。また本研究課題開始直前に行った口頭発表の内容をもとに、英語論文「The Scarlet Letter Variations #1: Mutual Percolation Effects between *The Scarlet Letter* and *In the Blood*」を執筆し、学内紀要上で発表した。これは文学作品の翻案（adaptation）は原作とその焼き直しという「親子関係」にあるだけでなく、翻案によって原作のまったく異なる解釈が可能となることを示す

論文であり、近年理論の整備が進められている翻案の問題を演劇研究に応用する試みとなっている。同論文には「#2」も予定されており、現在発表に向けて準備が進んでいる。さらに2017年度には前年度の Guillermo Verdecchia 論を発展される形で再度研究発表を行い、また「主演女優 Temple Drake——Sanctuary と Requiem for a Nun に見る「演劇的なもの」と題された研究発表では、小説家ウィリアム・フォークナーにおける一種の「翻案」の事例を通して、演劇が演劇として生み出される瞬間を捉えることを試みた。2冊の共著書に寄稿し、その内訳は上述のリアリティTV論についての論文1本と、学習者向けのアメリカ文学史の演劇に関する項目の分担執筆記事2本となっている。

(4) 2018年度には、小谷耕二編『ホームランドの政治学——アメリカ文学における帰属と越境』に論文を寄稿し刊行された。「パフォーマンスによるボーダーランドの再地図化——アメリカン・ホームランドの境界における観測」と題された同論文は、Verdecchia に関する過去2回の研究発表の内容を再構成したもののだが、同時に小谷を代表とする科研共同研究課題の成果発表を兼ねるものでもある。本論文により、今後も継続して進める予定であるラティーノ演劇研究への道筋をつけることができた。また口頭発表等を通して研究成果を発信した結果として、ラテンアメリカ事典への項目執筆依頼を受けるなど、さらに研究に広がり生まれることとなった。さらに本研究全体のテーマの根底にあった「演劇らしさとは何か」という問いについても、本論文において一定の結論を出すことができた。その結論とは、このテーマは「演劇とは何か」という存在論ではなく、「演劇が演劇らしく見えるとはどういうことか」という認識論によってアプローチすべきであるということである。この点においても、本論文は本研究課題の締めくくりにふさわしい成果であると言える。その他2018年度には、「母性」「家族」「演劇的イリュージョン」「演劇と幽霊と家屋セット」などのトピックについて複数の研究発表を行った。これらは順次論文として発表してゆく予定であり、また2019年度開始の科研課題（家族劇の歴史の変遷と文化的意義に関するもの）においても、引き続き考察を行うことにしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 岡本太助、「シェパード劇におけるパフォーマンスと表出的アイデンティティ」、『アメリカ演劇』、28・29号、2018、35-57（査読あり）
- ② OKAMOTO, Tasuke, The Scarlet Letter Variations #1: Mutual Percolation Effects between *The Scarlet Letter* and *In the Blood*, *Studies in Languages and Cultures*, No. 39, 2017, 47-58（査読あり）
- ③ 岡本太助、「「理論以後」のパラダイム——ラジーヴ・ジョゼフ劇における否定の存在論」、『アメリカ演劇』、27号、2016、32-56（査読あり）

〔学会発表〕（計9件）

- ① 岡本太助、「北米文学における母性とディストピア」、九州大学大学院言語文化研究院主催シンポジウム「現代における揺れ動く身体と言語」、九州大学西新プラザ、2019年3月17日
- ② 岡本太助、「Edward Albee の家族ゲーム——演劇的イリュージョンとしてのホーム」、日本アメリカ演劇学会第8回大会シンポジウム、HOTEL ルブラ王山、2018年8月26日
- ③ 岡本太助、「A Haunted House Named Theater——あいまいなものとしての境界」、九州アメリカ文学会第64回大会シンポジウム、北九州市立大学北方キャンパス、2018年5月13日
- ④ 岡本太助、「「アメリカ演劇」の生成——二人の Guillermo によるボーダーランドの再踏査」、日本アメリカ文学会第56回全国大会シンポジウム、鹿児島大学郡元キャンパス、2017年10月15日
- ⑤ 岡本太助、「主演女優 Temple Drake——Sanctuary と Requiem for a Nun に見る「演劇的なもの」」、日本アメリカ演劇学会第7回大会シンポジウム、広島経済大学立町キャンパス、2017年8月31日
- ⑥ 岡本太助、「初期アメリカ演劇と「ホームランド」の力学」、九州アメリカ文学会第63回大会、佐賀大学本庄キャンパス、2017年5月13日
- ⑦ 岡本太助、「記憶の精確な座標」——Guillermo Verdecchia 劇における転位と越境」、日本アメリカ演劇学会第6回大会シンポジウム、エスカル横浜、2016年9月11日
- ⑧ 岡本太助、「建物と怪物——現代アメリカ小説におけるパフォーマンス」、日本英文学会九州支部第68回大会シンポジウム、佐賀大学本庄キャンパス、2015年10月24日
- ⑨ 岡本太助、「パフォーマンスと表出的アイデンティティ——Sam Shepard 劇をめぐる理論的考察」、日本アメリカ演劇学会第5回大会、大阪ガーデンパレス、2015年9月12日

〔図書〕（計3件）

- ① 岡本太助他、小谷耕二編、『ホームランドの政治学——アメリカ文学における帰属と越境』、開文社出版、2019、286（11-52）
- ② 岡本太助他、早瀬博範編、『21世紀から見るアメリカ文学史—アメリカニズムの変容—』、

英宝社、2018、235 (190-195、212-214)

- ③ 岡本太助他、貴志雅之編、『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』、金星堂、2018、387 (331-351)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K004948/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。